

小萩ちる・・・・

荒木 正純

かれこれ十五年程前のことである。わたしは、筑波大学に静岡大学から転任してきた。その一年ほどして、高村先生御退官の後を受けて、利沢先生が筑波に赴任されたのだと記憶している。

利沢先生は、東京教育大学の英文科の先輩として、われわれ後輩の耳には、教育大最初の文芸評論家であると聞かされていた。七十年代の学園紛争の余波の中、まだ文学が文化の中で特殊な地位、しかも畏敬の眼差しの投げかけられるものとしてあった。その世界に生きていられる方というので、どんなにかわれわれとは違うタイプの方ではないかと内心穏やかならぬものがあった。畏敬の念と不安の意識が混じりあっていたのではないかと思う。

お会いしてみると、優しい穏やかな、物静かな話し方をされるので、少々拍子抜けの感じがした。わたしは、やや虚構じみた言い方をしている。なぜなら、わたしが利沢先生にお会いするのは、これで実は二度目であったからだ。最初にお会いしたのは、大塚のご自宅に原稿を頂戴に御邪魔したときである。当時わたしは、教育大の大学院の修士課程の学生で、外山滋比古先生が編集なさっていた今は廃刊になり久しい『英語文学世界』という小雑誌の編集のお手伝いをしていた。その原稿を利沢先生のお宅まで頂戴に出かけたのである。さがしさがしお茶の水女子大の脇を通り抜けたどり着くと、十数階の大きなマンションであった。あいにくその日は、エレベーターが止まっていた。故障か、点検であったのか、記憶にない。ただ記憶にあるのは、非常階段を十一階まで登ったということだけである。ずいぶん暑かった。

その後は、お部屋に入って先生にお会いしたかどうか、まったく定かではない。一階に喫茶店のような店があったのではないか、と思い出されるだけである。筑波でお会いする八年程前のこと。

その後、色々とうたしを先生はお誘いくださり、つくばの西武デパートの七階の炉端焼き屋などで水曜日の午後、ビールを飲みながら、文学のこと、わたしの研究の進み具合、一般文学コースのあり方などをお話くださった。先生は、吾妻の単身

赴任寮にいらしたので、水曜日は都合がよかったのである。また、水曜日は会議があったりで、相談しなくてはいけないこともあった。

先生は、文芸言語研究科で課程博士を一番早く出されたお一人であった。韓国の金さんで、夏目漱石を研究していた。よく水曜日の夕方の飲み席で、「彼は頑固でねえ」と言われていた。指導の後の感想であった。利沢先生のテキストの読みと、金さんの外国人としての読みとの対決であった。その金さんは、その後立派な論文を仕上げ、日本で出版し、現在は韓国で大学教授となり、韓国の学生を育てている。利沢先生の読みが、あ那时的格闘が、韓国の学生の血に流れているのかと思うと、感慨ひとしおである。

もう一人の課程博士は、楊さんであった。中国本土からの留学生で、これも漱石研究であった。漱石の比喩表現の研究という、新しい可能性を切り開くものであった。しかし、彼女は二年ほどまえ、出産でなくなった。この論文は、英米の比喩理論をもとにしていたのだが、利沢先生の学風をよく反映していたと思う。

よく先生から御著書を頂き、勉強させていただいたが、わたしの脳裏に一番残っているのは、「小萩ちる」ということばである。これは、利沢先生のある文の表題であった。そうこれまで思い続けていた。しかし、念のために原文にあたると、「小萩ちれ」であった。この文は、「小萩ちれますほの小貝小盃」という芭蕉の即興的な句を核として、芭蕉の言語意識について論じられたものであった。だから、わたしの記憶の変換装置は、「ちれ」を「ちる」に変えて、独自のことばとして登録したようである。わたしは、自転車で大学から帰る道、秋にうなだれきみの萩の花に出会うと、いつもこのことばが口をついて出てきた。今もそうである。実は、楊さんが亡くなってからは、そのことがわたしにとっての「小萩ちる」のコノテーションとなっている。

近頃めっきり先生と御一緒することがなくなった。それは、わたしが自分の研究室で仕事をしなくなったからである。大学内の諸々の仕事もさることながら、そのことが一番大きな理由であろう。水曜日の五時頃に、わたしの研究室のドアが優しくノックされる。「どーぞ」と言うとドアが少し開き、すまなそうに「もう帰る？」と利沢先生はおっしゃった。やはり、あの頃が一番楽しかった。その思い出もまた、わたしにとっての「小萩ちる……」なのである。ちなみに、先生の文の中に、こう記されている――

「小萩ちれ」の句は、居合わせた人たちとの語らい、酒をくみかわして、拾った真緒の薄紅色の貝殻を、「盃にうち入れなんどして」の酔狂を想い浮かばせる。小萩、小貝、小盃という同じことばの繰り返しは、そうした寛ぎと戯れの気分の表現として読むがよい。
(「小萩ちれ」『新文学風景』4号所収、1981年)